

令和7年12月3日

大阪府社会福祉協議会 研修会

特養分科会「介護テクノロジー『移乗支援(非装着)』導入に関する実践研修会」

安全と安心を生む介護テクノロジーの活用と 生産性向上の推進

講師紹介

所属先 ロボタスネット株式会社

所在地 大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル1F

事業内容 業務改善コンサルティング
介護ロボット・作業負荷軽減ツール販売
安全衛生サービスの提供



逢坂大輔(DAISUKE OSAKA)

理学療法士 / 作業管理士

大阪府介護生産性向上支援センター 業務アドバイザー

ATCエイジレスセンター アドバイザー

介護分野の腰痛対策に20年以上携わり、移乗技術やコンディショニング方法を指導。

現在では、負荷軽減への移乗支援機器の導入まで一体的に支援。

「従業者のコンディションチェック」を通じて、

職員の身体と職場環境の両面から“腰痛を減らす”取り組みを進めている。

本日のメッセージ

- ①ポリシーより“実践”。現場で使える機器を使う文化をつくる
理念は大事。そして、実際に現場の負担とリスクを減らすことが重要
使える場面では機器を使う → 事故・腰痛・離職の予防
- ②安全と安心を“しくみ”として定着させる
「人が頑張る介助」からの脱却
道具で標準化 → 誰がやっても安全で同じ質のケア
人は“ケアに集中”できる時間を確保
- ③余裕を生み、ケアの質を上げる(テクノロジー活用で)
生まれた余裕を利用者に還元
組織力向上・定着率向上にもつながる

介護現場における生産性向上とは

介護現場における生産性向上とは、「介護の価値を高めること」

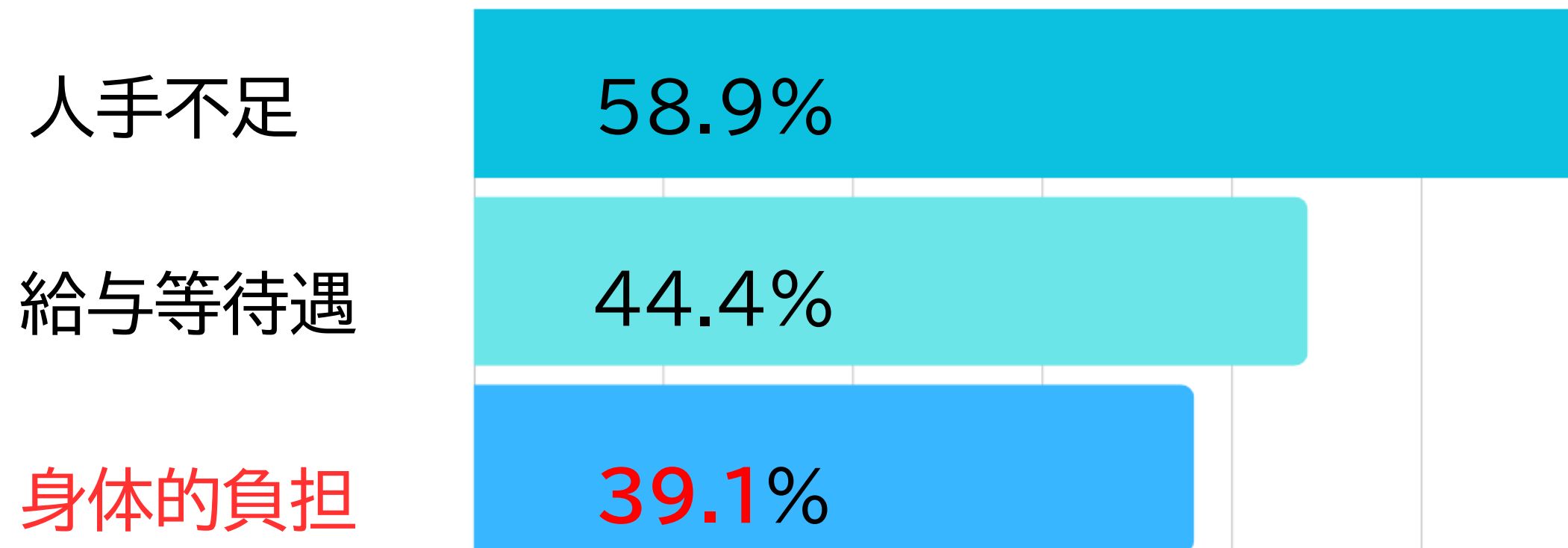
業務改善や介護ロボット等のテクノロジーを活用するなど、
職員の業務負担の軽減を図るとともに、
業務改善や効率化により生み出した時間を直接的なケアに充て、
利用者と職員が接する時間を増やすことで、介護サービスの質の向上にも
つなげていくことを指します。

(厚生労働省「介護現場における生産性向上に向けたガイドライン」より)

介護現場の課題

介護職員の悩み・不安・不満の上位項目

～身体的負担は依然として主要な悩み～



(令和5年度 介護労働実態調査・複数回答)

- 身体的負担は依然として大きな悩み
- 抱え上げ介助が身体負担の主要因
- 人員不足×身体負担が離職リスクにつながる

25年前の介護を振り返る

25年前

自立支援＋残存機能活用

いま必要な介護

- ・過介助
- ・抱え上げ中心
- ・頑張ることが美德
- ・人の力任せ
- ・属人化

- ・残存機能活用
- ・引き出す介助
- ・持ち上げない介助の広がり
- ・ただし抱え上げは残存
- ・属人化は解消されず

- ・負担を減らす仕組み
- ・機器を使った安全な移乗
- ・顔を見て丁寧に
- ・標準化(共通手順)
- ・チームケア(脱属人化)

“頑張りで解決する介護”から“仕組みで負担を減らす介護”への転換

介護ロボット普及と移乗支援機器

～リフトも補助対象となり、導入支援の環境が変わりつつある～

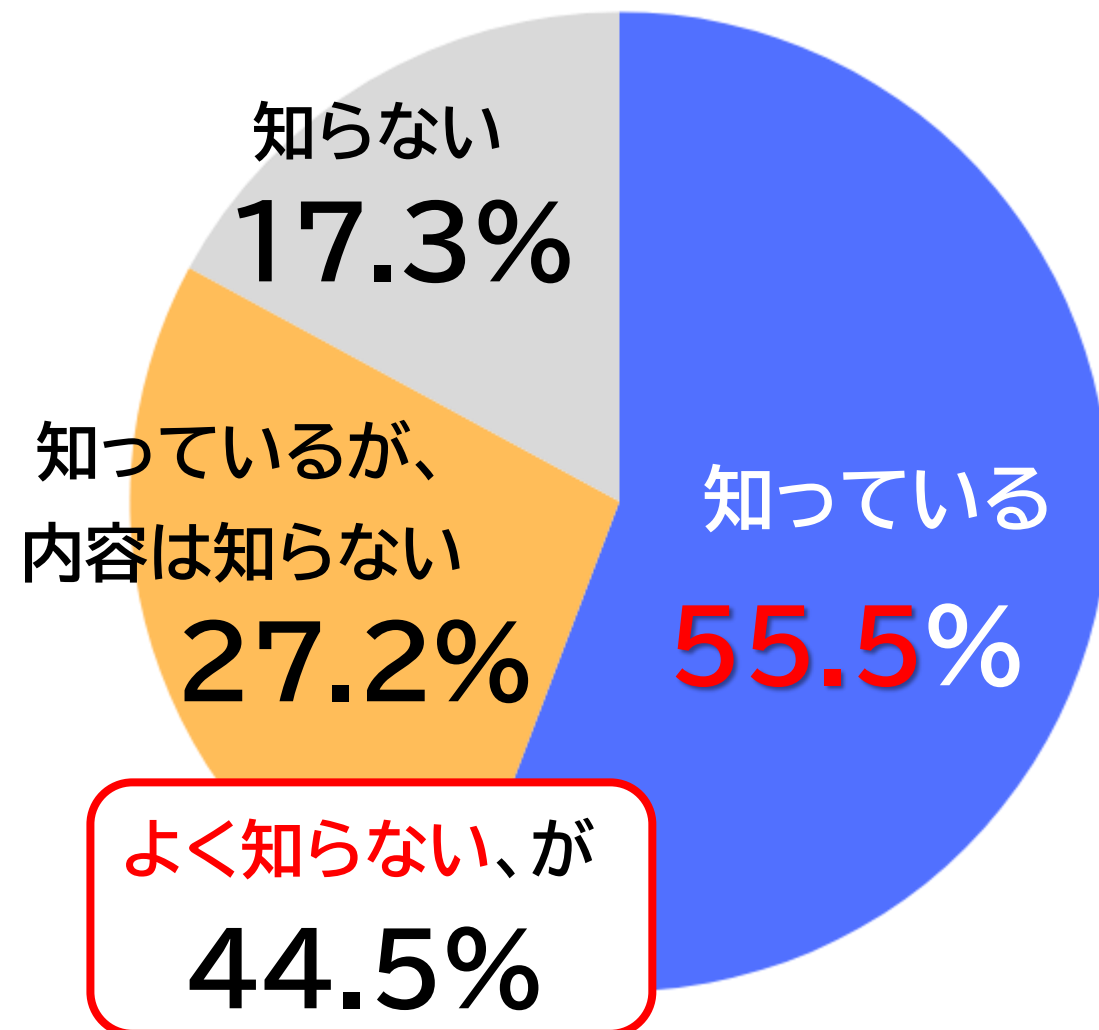
- ・介護テクノロジー導入支援事業補助金
- ・エイジフレンドリー補助金
- ・人材確保等支援助成金(福祉機器助成コース)



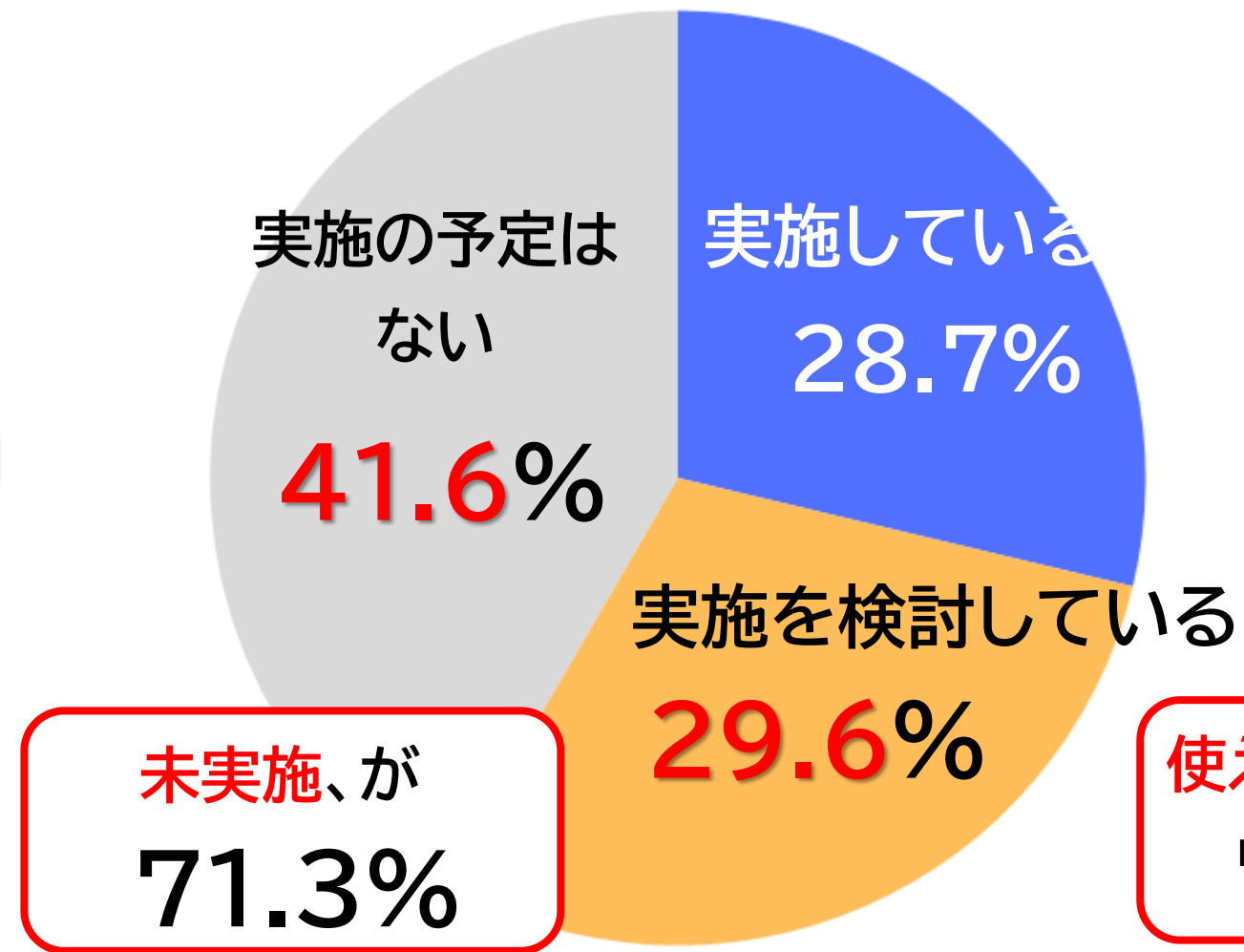
現場の意識は変わりつつあるが、実践・導入は追いついていない

「介護職員の身体的負担を軽減するための取組に関するアンケート調査」R5. 中央労働災害防止協会により実施

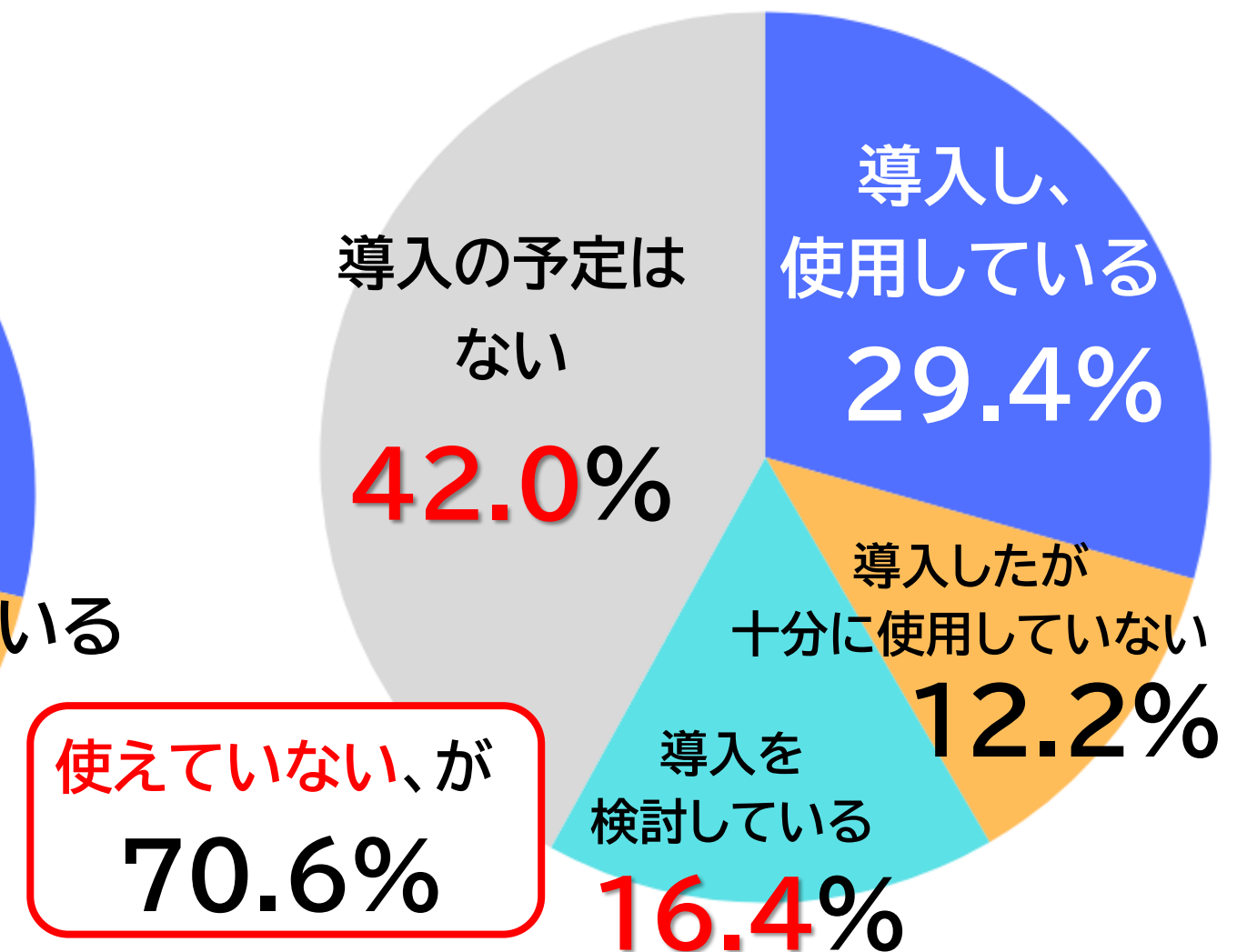
①ノーリフトケアの認知



②抱え上げを“行わせない方針”の明確化



③リフト等の負担軽減機器の利用状況



現場の意識は変わりつつあるものの、具体的な実践・導入はまだ追いついていない

非装着型移乗支援機器の分類

「移乗支援機器は“用途”と“利用者の状態”に応じて使い分ける必要があり、適切に選ぶことで作業時間も短縮され、負担軽減と安全性向上が両立します。」

区分	機器例	特長	活用場面
① 電動リフト	天井走行型・床走行型	全介助に対応、安全性が高い	ベッド⇄車椅子の確実な移乗
② 立位補助装置	スタンディングエイドなど	自立支援を促す	トイレ動作の自立支援
③ スライディングボード／シート	軽量・安価	短距離移乗に最適	数秒で終わる短距離の移乗
④ ベッド連動タイプ	自動起き上がり・移乗支援機能	夜勤や在宅ケア向け	夜間帯の少人数ケア

※ 本分類表はロボタスネットが現場支援の知見をもとに作成

- 使い分けのポイントは3つ。
- ① 利用者の身体機能に合わせる
 - ② 施設環境に適合するか(スペース・配置)
 - ③ スタッフトレーニングと安全管理のバランスをとる

現場の声は、

現場では、まだ“時間がかかる・慣れない”という声が根強い

・慣れていない → 手順が複雑に感じる

・忙しい → つい抱えてしまう

結果として定着しない

モデルケースから学ぶ

介護DXナビ

移乗支援ラボ 開発企業の方はこちら 相談はこちら 会社概要

★ ホーム > テクノロジー導入事例 >

【リフト事例】“持ち上げない介護”で腰痛ゼロへ。大今里ケアホームのリフト活用と職員定着の取組み

📍 リフト事例 📅 2025年10月24日 🕒 2025年11月19日



KOCHIKAI

SINCE 1994

大今里ケアホーム

種別：
介護老人保健施設

定員：
136名

使用ツール：
床走行式リフト

取材日：2025/09

リフト導入をいち早く実践

大阪市東成区にある「大今里ケアホーム」（運営：医療法人浩治会）は、定員136名の介護老人保健施設です。

モデルケースから学ぶ

介護DXナビ

移乗支援ロボ 開発企業の方はこちら 相談はこちら 会社概要

ホーム > 介護DXナビ導入事例 >

【リフト事例】“持ち上げない介護”で腰痛ゼロへ。大今里ケアホームのリフト活用と職員定着の取り組み

リフト事例 2025年10月24日 2025年11月19日



KOCHIKAI

SINCE 1994

大今里ケアホーム

種別:

介護老人保健施設

定員:

136名

使用ツール:

床走行式リフト

取材日: 2025/09

リフト導入をいち早く実践

大阪市東成区にある「大今里ケアホーム」(運営:医療法人浩治会)は、定員136名の介護老人保健施設です。

「慣れた人が使うと、むしろスムーズだった」

- ・見学者が「これなら使える」と感じる
- ・習熟が進むと“安全で早い”になる

モデルケースの Before→After

スタッフ

Before

- ・腰痛が多発し、慢性的な痛みに悩む職員が増加
- ・労災申請をしたケースも
- ・痛みを抱えた業務で作業効率も低下



とにかく身体負担が大きい

After

- ・腰痛・肩痛などの身体負担が大幅減少
- ・高リスクな業務体制からの脱却
- ・リフトを当たり前を使う文化が定着し、心理的抵抗感も解消
- ・離職リスクの低下、職場の安定化へつながる



身体損傷リスクが劇的に低減

○老人保健施設

必要なフロアへの拡大配備の結果、負担の大きい移乗業務を適正化したことで、現場全体の安全性と生産性が着実に向上した。

リフト導入をいち早く実践

リフト導入 ある特養の Before→After

ご利用者

Before

- ・緊張・不快感が生じやすい
- ・姿勢が不安定で負担の大きい移乗
- ・介助者により姿勢のばらつきが発生
- ・安心で均質なケアが受けられていない

スタッフ

- ・腰、腕などカラダの負担が大きい
- ・2人介助が必須で時間を取られる
- ・タイミングが合わず焦りや事故リスクが増加
- ・忙しいと抱え上げに戻りやすい

After

- ・緊張のない**安心な移乗**の実現
- ・姿勢が安定し、身体負担が減少
- ・誰が介助しても同じ**安全性**
- ・**座位姿勢の改善**などのメリットも
- ・腰痛・損傷**リスク**が大幅**減少**
- ・多くの場面で**1人**で安全に移乗が**可能**
- ・安全手順が標準化され、ケアの**質が均一化**
- ・時間の余裕が生まれ、焦りのないケアに

A特別養護老人ホーム

人力介助を続けることが拘縮リスクを高める

① 他動的でも“利用者の動く機会”が減る

- ・ 介助者の力で持ち上げる
- ・ 身体を預けるだけになる
- ・ 関節を動かすチャンスが減り、筋活動も低下

➡ 「使わない関節」が増える

② 恐怖・不安・痛みによる防御反応

- ・ 持ち上げられる時の不安定感
- ・ 身を固める“防御収縮”が起こる

➡ これが継続すると筋の緊張が抜けにくくなる

③ 力学的ストレス → 過緊張が続く

- ・ 無理な姿勢・持ち上げ・回旋で組織に負担
- ・ 小さな張り付き（微細損傷）が積み重なる

➡ 部分的な緊張が固定化

④ 動かさない + 過緊張の慢性化

- ・ 不動と筋緊張持続の悪循環が形成
- ・ 毎回の人力介助で拘縮リスクが加速

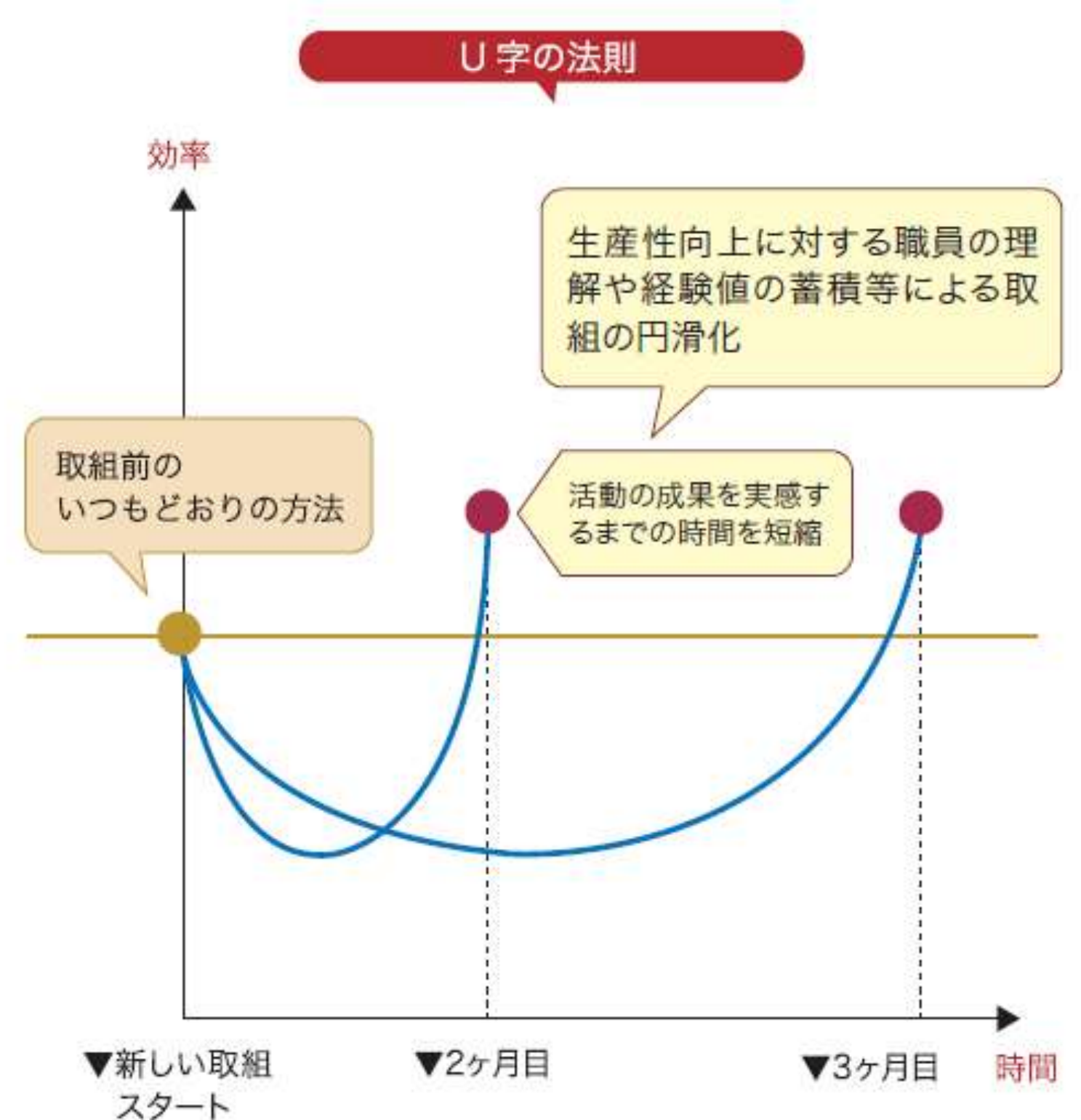
➡ 環境要因で拘縮が進行する

機器による介助は、拘縮リスクの悪循環を断ち切る仕組みになる
エビデンスの効いた介護手法による“**質の高い介護**”の実践へ！

リフトは“人手不足の現場ではむしろ強い味方”である

「人がいないから急ぐ」の発想転換

- 2人介助 → 1人で安全に移乗できる
- 夜勤や少人数でも 安定したケアができる
- 忙しい・人手が足りない
→ だからこそ導入価値が高い
- 慣れると早い・安全性が上がる



移乗支援で“ケアに向き合う時間”を生み出す

ケアの時間を取り戻し、顔を見て移乗するという介護の原点へ

	従来の手作業移乗	リフト移乗
1回にかかる時間	短いようで、実際は？	安定すると短い
スタッフ人数	2人必要	1人で可
ヒヤリハット後の対応	多い(記録・報告)	激減
利用者との対話時間	ほぼなし	表情を見て声かけ可能

“安心”を届けるケアを実践

- 💡 移乗支援は“ケアの時間”を生み出す業務改善
 - 抱上げ移乗は時間・人数・事故リスクが大きい
 - リフト移乗は手順が安定し、1人で安全に実施可能
 - その結果、生まれた時間を“ケアに向き合う時間”として還元できる

移乗支援の標準化が組織力を高める

業務最適化の3ステップ

- ①【可視化】: どの動作で負担が大きいかを把握
- ②【標準化】: 安全な手順をチーム全員で共有
- ③【最適化】: テクノロジーでムリ・ムダ・ムラを減らす

標準化がもたらす効果

-  安全手順を共有することで事故リスクが減る
-  誰でも同じ質のケアが提供できる
-  属人化の解消 → 組織力の向上

リフト導入がもたらす 3つの生産性向上

① 安全性の向上

事故・腰痛・損傷リスクが減る



- ・ 職員の健康維持
- ・ 離職防止にも寄与

② 効率性の向上

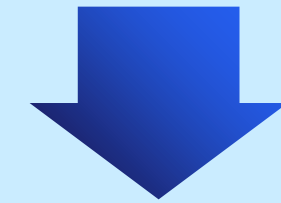
1人介助の範囲が広がる



- ・ 業務配分の最適化
- ・ 過重業務の偏りを解消

③ 継続性の向上

安心して働ける職場



- ・ 定着率向上
- ・ 組織力の強化

「負担軽減」では終わらない ➡ “組織にとっての生産性向上”

持続可能な介護のために

リフト導入は、良い機器を適切に使い、介護の質と組織の未来を守ること

- 「抱えない理念」→「機器を使う文化」を根づかせる
機器が使える場面では機器に任せることでリスクを減らし、
長く働ける環境をつくる
- 安全と安心を仕組みとして定着させる
「人が頑張る介助」から、「機器を活かし、人はケアに集中できる介助」へ
安全手順を統一し、誰がやっても同じ質のケアが提供できる
- 人に余裕を生み、ケアの質を高める
機器を利用して生まれた時間を、利用者と向き合う時間へ還元

“テクノロジー活用型介護” に一歩踏み出しましょう。

今こそ！ リフトの積極活用で 介護する側も介護される側も幸せに！

本日のまとめ

- ・人力介助の限界が明確に。安全・安心の阻害要因にもなる
- ・機器活用で安全と安心を“仕組み化”し、ケアの標準化が進む
- ・時間の余裕が生まれ、生産性が向上し、ケアの質も上がる

今後の展望

- ・機器利用が“当たり前”の職場づくり（教育・配置・定着）
- ・テクノロジー活用型介護で安全 × 生産性向上をさらに推進
- ・職員が長く働ける、持続可能な組織へ

ご清聴ありがとうございました。

ご質問などは

osaka@robotasu.net までお願いします。